不安な証言

不安な証言
三〇〇円

昭和三十七年八月二十日印刷
昭和三十七年八月二十五日発行
著作者　笹沢左保
発行者　角谷奈良雄
発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区牛込払方町一
振替口座・東京二一七五七

不安な証言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

歪みの結晶　5
真昼の月　57
神前殺人　107
愛憎記　143
甘美な殺意　173
不安な証言　203

裝幀　斎藤三郎

歪みの結晶

1

新宿から小田急電鉄は世田谷区を西南に横ぎっているが、多摩川に達するまでの各駅付近の町は繁華街と住宅地が奇妙な融合を見せている。下北沢、豪徳寺、経堂、成城というふうに小田急沿線には名のある町が揃っているが、どれも一様に商店街と住宅地が、路地一つ隔てたくらいに密着して町全体を形成しているのである。

これは、最初純然たる郊外の住宅地であった土地が、人口の増加に伴って駅周辺だけが急速に商店街として発展したせいである。だから、駅前通りとか駅の周囲とかに商店が密集していて、それが切

れたとたんにもう庭の広い邸宅が続くといった工合なのだ。普通の町であれば、繁華街から次第に閑静になり、やがて住宅地というわけなのだが、この小田急沿線の町はネオンに彩られた商店の裏がすぐ樹木の繁みに囲まれた邸宅のテニスコートだったりする。つまり、昔からの住宅地の外側にあとから商店街を貼りつけたという、メッキのような町の表面だった。従って、これらの町の道路は非常に狭い。それにタクシーの運転手泣かせである、名物の迷路のように入り組んでいる道が多かった。

駅前の狭い道路に、人と車の交通量は増すばかりである。通行人を電柱の陰に追いはらいながら、バスが我がもの顔に通る。車の警笛が絶えず鳴り、街頭宣伝の女の声が一日中喋り続ける。新装開店のビラを撒きながらチンドン屋が通り、区役所のマイク・カーが区民のみなさまとがなり立てて走る。パトカーのサイレンが聞えたかと思うと、中学生の一団がかけ声とともにマラソンのトレーニングに駆け抜けて行く。

目を閉じていれば、その町の喧騒ぶりは都心と少しも違わない。

ところが一歩、足を横道に踏み入れると、それらの騒音はパッタリと跡絶える。目にしみるような朔黄色の樹木の繁みと日射しを受けて銀色に輝く洋館の屋根、そして聞えてくるのはピアノの爪弾きと鳥の囀りだけである。人通りのない道路を、風が吹き抜け樹木の影が揺れる。

この町の表裏の区別は夜になるともっとはっきりする。駅前通りはまだ宵の口だというのに、住宅

街はすでに深夜を迎えている。眠っていないのは犬のなき声と、たまに通りすぎる勤め帰りの人の靴音だけであった。庭が広く植込みの多い家ばかりだから、あたりの闇は厚い。人通りは殆どなく、この辺の住人たちは車で帰って来る場合が多いのである。だから、もし駅前通りがまだ賑わっている時間に、そこから二百メートルと離れていない住宅街の一角で殺人が行われようと、決して不思議ではないのだ。

小田急沿線の経堂に近いF町の住宅街で、八代民江という二十歳の娘が殺されたのも、恰度そのような状況下においてであった。

F町二丁目二十四番地は、小田急線F駅前の繁華街を西へ四百メートルほど行って、団地の手前を右へ折れた住宅街だった。八代民江が殺された現場は、志村雄造という表札の出ている家の庭先である。この一角には、住宅街の奥にくらべるとはるかに貧弱な家が数軒並んでいた。貧弱とは言っても、四間か五間はある木造建築の家で、庭もあり門もついている。ただ邸宅と違って石垣やコンクリート塀に囲まれた家ではなく、隙間だらけの垣根で道路との境を区切ってあった。

八代民江の死体が発見されたのは、七月三日の朝だった。志村雄造が自分の家の庭先に若い女が倒れているのを見つけたのである。中学校の教頭である志村雄造は、いかにも冷静な教育者らしく騒ぎ立てるようなことはしないでF警察署に急報した。

八代民江は志村家の隣家に面した庭に俯伏せて倒れていた。八手の木の根元に頭を向けて、恰度水へ飛び込む時のように両手両足を揃えてのばした姿勢だった。剝き出しになった白い四肢には、朝露の粒がのっていた。検死の結果、死因は扼殺による窒息死で、死亡推定時刻は前夜七月二日の午後八時から九時頃までの間ということだった。

八代民江はこの住宅街の奥に住んでいる八代信一郎という会社重役の長女だった。短期大学に通っているが、人なつこい少女じみた顔の娘で近所の評判も悪くはなかった。身体は成熟していて、若々しく発達した肢体は弾むように肉づいて、胸の円味や腰の曲線が瑞々しかった。

八代民江の死体は、リネトロンのノースリーブブラウスと裾にレースをつけた水色のフレアスカートをつけていた。ハイヒールも脱げていなかったし、服装も乱れてなかった。美貌ではないが、生前は可憐な愛くるしい娘だっただろうと思われる八代民江の顔は、恐怖と苦悶に歪んでいた。だがそれでいて、抵抗したらしいあとは認められなかった。不意に襲われたか、そうでなければ顔見知りの者の犯行ということを物語っていた。死体解剖の結果、暴行された形跡はなかった。というより八代民江の身体は、まだ男を経験していなかった。

八代民江は七月二日の午後から家を出ている。母親には銀座へ行き、それから自由ヶ丘の友達のところへ回ると言い置いてあった。事実、彼女は自由ヶ丘の同じ大学の女友達の家に寄ったことが分っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。八代民江は友人の家を七時前に出ている。自由ケ丘からF駅まで約一時間かかったと見て、八時頃犯行現場に来たという時間の点では辻褄が合う。つまり、八代民江は帰宅途中に何者かとある事情のもとに志村家の庭へ入り込み、そして殺されたと見るべきなのである。

ここで、八代民江がなぜ誰と志村家の庭へ入ったかが注目すべき点であった。志村家の家族は雄造と一人息子の春男、それに雄造の姉の富子、この三人だけだった。雄造一家は以前文京区の駒込に住んでいたのだが、二年ほど前、近所から火を出した火事で焼け出され、富子が夫を亡くして一人ぼっちになっていた際でもあり、このF町の富子の家に越して来て住みついたのであった。その火事で、雄造の妻は焼死した。

七月二日の晩、雄造は病死した友人の通夜に出掛けていて、帰宅したのは十一時頃だった。すでに庭先で八代民江が死体になっていた頃で、雄造は庭での人声やもの音には当然気がつかなかったわけである。富子は当夜、ずっと家の中にいたのだが、六十に近い彼女は耳が遠い上に九時には床につく習慣なので、やはり庭先でどのような騒ぎがあったか知っていなかった。

一人息子の春男は二十一になる青年で、下北沢の北沢第一不動産に勤めていた。教育者の一人息子として、大学卒業まで進学するのが常識だろうが、二年前に入って間もない官立大学を中退して北沢第一不動産に勤め始めた。頭もいいらしいし父親に生活能力があるのだから、春男が大学を中退する

理由はなかったはずである。雄造に言わせると、母親の焼死が衝撃となって春男は勉学を続ける気力を失ったのだということだった。

F署に設けられた捜査本部が、まずこの志村春男を捜査の対象においたのは、当然というべきである。必然性という糸をたぐれば、志村春男が容疑圏内に入るわけだった。

第一に、八代民江は二十歳、志村春男は二十一歳、しかも近所に住んでいるという点で、二人が顔見知りあるいはそれ以上に親しい仲だったと見るのは妥当だった。同年輩の若い男女、そして一日に一度は顔を合わせる——ということは、大人と違って二人がすぐ気安く付き合えるようになる確固とした要素なのである。

八代民江と志村春男が恋愛関係にあったというような、はっきりした近所の噂はなかった。しかし、だからと言って二人が口もきかないような間柄だったという証明にはならない。互いの家が近所同士であれば、二人は自分たちの関係を隠そうと努めただろうし、公然とやらない限り恋愛というものは人に気づかれにくいのだ。

八代民江と志村春男がそのような仲であったということを前提にすれば、第二に、彼女が、志村家の庭へ入り込んだのも当然と言えるのである。志村家に全く関りない人間が八代民江を現場に連れ込んだとは、まず考えられないことだった。幾ら垣根の隙間をくぐって道路から直接入り込める庭だっ

たとしても、他人の家へそうは気軽に侵入出来るものではない。たとえ、加害者が誘ったとしても、八代民江の方で拒んだろう。

だが、八代民江の相手が志村春男だったとすれば問題はないのである。志村春男にしてみれば、自分の家の庭に親しい人間を呼び込むのは当り前のことなのだ。

しかし、自分の家の庭で人を殺す馬鹿がいるだろうか、という反論がないでもなかった。この反論は、志村春男が殺す目的で八代民江を庭へ誘い込んだのではないという想定によって否定された。もし最初から殺すつもりであれば、勿論、自分の家の庭へなど引っ張り込まなかっただろう。志村春男は八代民江と話し合うために、道路上では人目に触れるというので、庭へ彼女を連れ込んだのだ。二人の間には、何らかの悶着が生じていたのに違いない。だが、二人の話し合いはこじれた。殺意はそのあとで生じた。志村春男は逆上気味に八代民江の首に腕を巻いたのではないだろうか。八代民江が死んだあとは恐怖のために、死体をよそへ移すことなど思いつきもしなかったのだ。

以上の推定を基に、捜査本部はその裏付け捜査を行った。

志村家の右隣り、つまり八代民江の死体があった庭と朽ち果てた板塀一枚で接している家には、高畑せんという中年の女の一家が住んでいた。高畑せんは新橋で小さな料理屋を経営していた。このF町の家から新橋の店へ通っているのである。商売柄、家を出るのは午後だったが、帰りは夜中の一時

になるとのことであった。勿論、高畑せんは七月二日の晩も夜中に帰宅したので隣家の庭の騒ぎについては気がつかなかったという。家族は彼女の母親である七十一歳の中風の老婆と、小学校六年と五年の子供二人であった。老婆と二人の子供も、志村家の庭であった殺人事件には気づかなかったそうである。

高畑せんの家では、収穫となる聞き込みを得られなかった。若い時から水商売で育って来て、女手一つで新橋に店を持ったという高畑せんは、商売熱心な気の強い女らしく、あまり近所付き合いをしていなかった。志村家の家族とも、顔を合わせれば挨拶を交わす程度だった。しかし最近、高畑せんは一度だけ志村春男と挨拶以上の接触を持った。それは高畑せんが家を売りに出したいと、志村春男に相談を持ちかけた時のことであった。高畑せんは、F町の今住んでいる家を売り、新橋の店を拡張する費用に当てるつもりだった。それで、たまたま不動産屋に勤めていると聞いていた志村春男に、あなたの店でも周旋を扱って欲しいと頼んだわけである。志村春男はそれを引き受けたそうで、高畑せんが彼と交渉を持ったのはあとにも先にもこの時だけだったという。つまり、高畑せん一家は今度の事件はもとより、志村春男の生活範囲に殆ど触れてなかったと見ていいのである。

志村春男の生活態度、性格については、志村家の左隣りに住む関恭子の方がはるかに詳しかった。関恭子は銀行員である夫と、二階建ての家に二人暮しだった。関恭子は夫の関和範と結婚して六年目

だが、未だに子供が出来なかった。今年で二十九歳になる関恭子は女としての盛りの時期を迎え、白い肌に脂肪がのりきったような女だった。子供もなく夫を勤めに送り出したあと、ただただ閑を持て余す人妻にありがちな観察屋で、関恭子の近所の人間についての情報は豊富だった。退屈しきっている二十九歳の女は、隣家の一人息子と必然的に親しくしていたようだ。関恭子の話によると、志村春男は無口でおとなしい青年だが、その陰鬱そうな翳の裏側に炎のような激しいものを秘めている、ということだった。それは関恭子の女から見た印象で、二人きりでいたりするとふと志村春男に恐怖に近いものを感ずるそうであった。一度怒らせたら何をするか分らない、つまり逆上型の性格ではないか、と関恭子は言った。

関恭子からは、もう一つ重大な聞き込みを得た。それは志村春男と八代民江の関係についてであった。関恭子は、志村春男と八代民江が熱烈な恋愛関係にあったと言いきった。彼女は一度、二人が志村家の裏庭で接吻を交わしているのを二階の窓から目撃したというのである。関恭子のこの証言は価値のあるものだった。これによって、志村春男と八代民江が特別な関係にあったことが裏付けられたのだ。八代民江が処女であったからには、二人の仲は肉体関係にまで発展はしていなかったことになる。しかし、若い男にとって恋人の存在は重大なことだ。もし八代民江に裏切りなり心変りなどがあったとしたら、志村春男は殺意にまで気持をつきつめさせたかも知れない。

事件当夜の状況から考えて、近頃自分を避けるようになった女を男が待ち受けていて、たまたま帰宅途中に通りかかった女を呼びとめ、手軽な場所として自分の家の庭を選び、男は話し合いを求めた——という想定が成り立つのである。

捜査本部では、志村春男に重要参考人としての任意出頭を求めた。最も肝腎なことである七月二日夜の志村春男の行動を訊くためであった。

志村春男は事件当夜、九時半頃帰宅したと答えた。九時頃まで勤め先の北沢第一不動産に居残っていたというのである。北沢第一不動産は井の頭線の下北沢駅ホームを目の前に眺める繁華街のはずれにあった。社長の家の通りに面した一部を周旋屋らしく改造したところで、四坪ほどのその事務所へ六人の社員が出入りしていた。契約その他のことで特別な事情がない限り、夜七時には社員たちは引き揚げることになっていたが、七月二日の夜、志村春男は客に希望のアパートの部屋を検分させるために、池ノ上まで案内して行って、北沢第一不動産の事務所に戻って来た時がすでに七時半だった。

事務所には古手社員である下地信彦が一人残っていた。志村春男は帰る家に特別楽しさがあるわけではなし、そのまま事務所のソファに腰を据えて下地信彦と雑談したり、かけっ放しのテレビへ目をやったりして無為な時間を過した。やがて退屈を覚えて志村春男が立ち上ったのは、九時を少し回った頃であった。従って、彼がF町の家についたのは九時半頃のはずだった。家に帰った志村春男は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com